



太田 凡 教授 略歴

昭和37年11月16日生

昭和63年 3 月 京都府立医科大学 医学部医学科 卒業

昭和63年 4 月 京都府立医科大学 第2内科 入局

平成元年11月 京都第二赤十字病院 救命救急センター
医員

平成 4 年 4 月 京都府立医科大学大学院 医学研究科
入学

平成 8 年 3 月 医学博士

平成 8 年 4 月 京都第二赤十字病院 救命救急センター
医員

平成14年 4 月 湘南鎌倉総合病院 救急外来・救急総合診
療科 医長

平成16年 1 月 湘南鎌倉総合病院 救急総合診療科 部長

平成22年 4 月 京都府立医科大学大学院 救急・災害医療
システム学 教授

令和 6 年12月24日逝去 享年 62 歳

太田凡教授を偲んで

救急・災害医療システム学教室の2010年4月の開設以来、教授を務めておられました太田凡先生が、2024年12月24日に逝去されました。ここに心よりの哀悼の意を表します。

教授選考の折には「学生と初期研修医の教育に専念する」との条件が出され、赴任当初「府立医大には歴史と文化があり、救急は馴染まない」と言われたとお聞きしていますが、その後、教育には診療の場が必要であるとの信念のもと徐々に救急診療の時間、幅は広がって参りました。そしてついには2024年4月1日から救命救急センター指定を受けるに至ったことはみなさまご存知の通りです。元より救急診療は一握りの救急医のみでできるものではなく、各専門診療科の先生方のバックアップや多くのメディカルスタッフの皆様のサポート、そして多くの医療機関の後方支援をいただいて遂行できております。その道のりは平坦ではありませんでしたが、太田凡先生は信念を持ってその道を切り開き、さまざまな方の支援を受け、常に前進を続けてこられました。

救命救急センター指定を受けてこれから更なる発展を、という段階で病に侵され、その任に就かれたまま旅立たれたこと、残念でなりません。残された我々はその想いを受け継ぎ、学生、初期研修医、専攻医を含めた後進を育て、24時間誰にでも開かれた医療への公平なアクセスを守って参ります。

太田凡先生の思いは我々が語るよりも、太田凡先生ご自身の言葉でお伝えするのが一番かと思います。太田凡先生が京都の地を離れ、単身、湘南鎌倉総合病院の救急部長として赴任された時に見学の学生に向けて書かれた、救急医療に対する想いを抜粋して転載させていただきます。

～太田凡先生の文章より～

僕は普段から意識的に一次二次三次という言葉を使わないようにしています。この概念は、患者さんの安全を第一に考えて作ったものではないと考えているからです。この概念は、病院

が患者さんを断る理由にもなっています。

胸が苦しいという患者さんが自分で軽症かどうか分かる訳がありません。頭を打った患者さんが重症かどうか、救急隊が責任を持って判断できるでしょうか。「どんな重症でもみます」と「重症だけみます」がどれほど違うか、患者さんの立場で考えれば簡単に分かると思います。

「いつでも、どんな患者さんでも、断らずに責任を持つてみるのが救急医療」ではないでしょうか。

さらに言えば、救急車で来る人が歩いてくる人より重症とは限りません。熱を出して歩いてくる人が、受付時間内と時間外で病状が違うわけではありません。救急という枠にこだわることに意味はないように思います。すなわち「患者さんが救急だと思えば救急」としか言えません。「なんでこんな時間にこんなことで」と思うような患者さんの中にも、「良かったですね、早く病院に来て」ということがあるものです。

患者さんが重症か軽症かを判断するのは専門科でさえ簡単でないことがあります。病院に来る前にそれを決めさせようとする日本の救急医療体制では必ず不利益をこうむる患者さんが出てきます。しかしその責任を誰が取るのかもはっきりしていません。いつでも、どんな患者さんでも病院が引き受けようとするれば、当然多くの患者さんを引き受けることになります。

すべての患者さんに必ずしも専門科の技術が必要とは限りません。とりあえずどんな患者さんでも診療に当たり、応急処置が必要であれば迅速に行い、自分の責任で処置や帰宅の判断を行う。必要と考えれば、各専門科に診療をお願いする。このような仕事、すなわちER医の業務が、軽症と重症を事前に区別せずに受け入れる救急医療に役立つはずで、そして同時に、各専門科の当直負担を軽減することにもつながります。

軽症か重症かわからない様々な患者さんにまず対応することを学ぶのは、若き医師にとって

将来必ず役に立つことだと思います。このような救急医療は ER 医だけで行うものではありません。救急隊の協力，病院中の協力，他病院との連携などがあって初めて行えるものです。そのような協力があって「いつでも，どんな患者

さんでも，必ず責任をもって受け入れる」ことが出来るのです。引用以上。

救急・災害医療システム学教室
講師 山畑 佳篤